



Title	中世文化人たちの蘇東坡と黄山谷
Author(s)	蔦, 清行
Citation	日本語・日本文化. 2017, 44, p. 1-30
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/60416">https://doi.org/10.18910/60416</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 中世文化人たちの蘇東坡と黄山谷

蔦 清行

### 一 はじめに（研究の背景と目的）

中世の五山禅林に、「東坡山谷味噌醬油」という言葉があったという。言うまでもなく東坡は中国宋代の文人蘇東坡（1036～1101。姓は蘇、名は軾、字は子瞻。東坡居士の号で知られる）、山谷はその弟子でやはり宋代の著名な文人黄山谷（1045～1105。姓は黄、名は庭堅、字は魯直。山谷道人と号した）のことをいう。件の言葉は、芳賀幸四郎の解釈によれば、「東坡詩と山谷詩とは味噌醬油の如くありふれたものではあるが、不可欠必需のものだという意味である」という。本稿の筆者は浅学にしてこの言葉の実例を当時の資料中に見出したことがなく、従って芳賀の解釈の当否についても何も言えることはないのであるが、この「東坡山谷味噌醬油」なる言葉が実際にあったのであることは、『鹿苑日録』で「東坡」が味噌の異称として用いられていることから知られるであろう。

搗東坡漬瓜香物矣。求阿虎陀瓜。『鹿苑日録』天文七（1538）年六月十八日）

大豆涵水。東坡之用意也。『鹿苑日録』天正十九（1591）年三月十日）

夕飡過テ壽林・新九郎堺へ遣。麴鹽トヲ取用也。則東坡ヲ煎用意也。『鹿苑日録』慶長五（1600）年正月六日）

漬け物作りに使われ、製法の中に大豆を水に漬ける行程が含まれ、そして煮るときに麴と塩が必要、というところから、この「東坡」が味噌のことを表すことは疑われないであろう。

このように味噌のことを東坡と呼ぶ理由を、『日本国語大辞典』では『かたこと』の「味噌のからなを東坡と付たるやうのことは、やさしく侍る」という記述を挙げ、「蘇軾と父の蘇洵、弟の蘇轍の三人を三蘇(さんそ)というが、三蘇は「みそ」とも読めるところから」と解説している。この説は、大田南畝の随筆『一話一言』の説に拠っているのではないかと思われる。南畝は、『一話一言』巻十四において、『かたこと』の同じ箇所を引用し、そこに「覃按、三蘇といふことか。」と自説を記しているのである。ただこの説は、狂名「四方赤良」として知られた狂歌作者でもあった南畝一流のこじつけという感は否めず、假にこの三蘇説が真実であったとしても、その背後に先の「東坡山谷味噌醬油」があったと考えた方が理解しやすいであろう。この言葉は、現在に残る実例はそう多くないようであるけれども、同時代にはそれなりに流布していたらうと考える所以である。

しかし、東坡・山谷を味噌・醤油と並べて挙げるその響みにならって言うならば、味噌と醤油にはおのずから味わいと用法の違いがあるように、東坡と山谷とでも、その興味と享受のあり方にはおのずから相違があったはずであろう。

本稿は、主に五山僧や公家を中心とする当時の文化人たちが、蘇東坡と黄山谷の詩文をどのように享受したのか、両者の間にどのような違いがあったのかを明らかにしようとするものである。

## 二 先行研究と研究の方法

この問題についての最も重要な先行研究と位置づけられるのは、やはり芳賀幸四郎の著作である。芳賀の研究は中

世の文化と学藝全般にわたるものであり、漢籍に関するものだけでも膨大な量になるため、その一部だけを切り取って紹介することには慎重でなくてはならないが、今敢えて本稿の問題意識に関することだけに限って言うならば、芳賀の考え方は、中世後期の公家社会においては東坡こそが最も愛された文人であり、山谷はそれにはやや及ばなかった、そして禅林においても、両者の差は公家社会におけるほどには大きくなかったものの、この傾向は基本的には変わらなかった、と総括してよいかと思われる。

やや具体的に紹介すれば、まず公家社会について見ると、東坡については、主に同時代にきわめて多数の講義が行われたことから、「最も彼らの支持をうけその教養に滲潤した文學は東坡の詩集である」と最大の影響があったことを述べている。これに対して山谷の場合は、『實隆公記』などの日記に見える山谷講義の記事を紹介したうえで「管見の及ぶところ山谷詩に寄せられた關心の反映はこれだけで、東坡や三體詩にくらべては勿論、杜甫に比してさへ低調といつてよい」と断じている。

禅林についてはこれほどはつきりした記述はないが、「禅林における東坡流行の一つのバロメーターとして、例によつて翰林五鳳集の巻第六十一をひらくと、(中略)百首にのぼる東坡に関する詩が見出される。屈原の八首、淵明の六十五首・杜甫の四十五首・李白の四十一首・韓愈の十六首などにくらべて、まことに圧倒的な数というべきで、(中略)東坡の圧倒的流行を推定」<sup>13</sup>することができる、というのが最も簡潔な東坡評であろう。一方山谷は、受容の時代が東坡よりもやや新しいこと、それでも「惟肖得巖・江西竜派の頃から、山谷がようやく禅林に普及し、応仁の乱前後から急速に流行し出したのではないか」「室町中期の代表的五山禅僧の殆んどすべてが山谷詩の註釈を試み、その著しく流行したことが知られる」また「山谷詩はこのようにして地方にまで流行したのであった」と、後にはきわめて盛んに読まれたことが述べられる。ただし、東坡の場合にその流行の一つのバロメーターとして挙げられた『翰林五鳳集』には、山谷関係の詩は二十首にとどまっている。<sup>15</sup>東坡の詩が百首におよんだことを踏まえれば、芳賀は、禅林においても、公家社会の場合と同様、山谷の影響は東坡に及ぶほどのものではなかったと見ていると解して

よいであろう。

さて、味噌と醤油——東坡詩と山谷詩——の味わいの違いは、芳賀の述べる通りに考えてよいのであろうか。考察を始める前に、もう一つ、重要な先行研究に位置づけられる文献を挙げておきたい。柳田征司「抄物目録稿（原典漢籍集類の部）」である。柳田のこの研究は、現在残された「集」部の漢籍について作られた抄物を系統別に網羅的に記載したものであるが、ここでは東坡の詩文の抄物が八系統報告されているのに対し、山谷はそのおよそ二倍にあたる十四系統から十六系統が挙げられている。<sup>(16)</sup> しかも、山谷の詩の中でも最も著名なものと目される『演雅』の詩単体につけられた抄もあり、それを加えればさらに二系統から五系統の抄物が確認されているのである。<sup>(17)</sup>

この事実はどのように解釈すべきであろうか。先に示した芳賀の研究では、山谷詩の流行は、十分に顕著なものではあつたけれども、その程度は東坡詩にはやや劣ると考えられるものであつた。ところが抄物に目を移すと、むしろ山谷詩の方がよほど流行の様相を見せているように感じられるのである。

もちろん、系統数だけを問題にするのは、問題を単純化しすぎているかもしれない。また柳田の研究は現在残っている抄物について行われたものであるから、火災や戦災等によつて失われた東坡の抄物が多いということであるのかもしれない。しかしそれにしても、およそ二倍という数の違い、そして単体の詩に対する抄が作られていることは、やはり無視できないように思われる。

さらに言えば、桃源瑞仙（1430～1489）の弟子某が桃源および景徐周麟（1440～1518）から聞き書きした抄物『蕉窓夜話』に次のようにあることは、東坡と山谷が同格の位置づけにあつたことを物語るのであろう。

三昧皆僧有鬚鬚。才名已等玉堂蘇。幼輿岩壑若攀<sup>レ</sup>例。宜<sup>下</sup>向<sup>二</sup>梅花樹下<sup>一</sup>圖<sup>下</sup>ス。

是モ惟肖ノ谷ガ贊ニメサレタゾ。心ハ山谷ガ一向ニ僧ノ様ナル人ヂヤゾ。僧<sup>下</sup>デナイ處ハ鬚鬚トガアルマデゾ。其マデハナイゾ。オト名トハ蘇門ノ四學ノ内ナレドモ。東坡山谷トテ。蘇ト等ゾ。

傍線を施した部分から明らかなように、ここでは、山谷は東坡の弟子ではあるが、才能と名声は東坡に並ぶものであることが強調されているのである。

このように見てくると、東坡と山谷の享受の相違は、芳賀の考えのように程度の問題であるとは、単純には言えなくなってくる。もちろん程度の差もいくらかはあったかもしれないが、それに加えて両者の間には扱ひ方の違いがあり、その違いが、山谷詩に多数の抄物が作られるという結果につながっているように思われるのである。本稿は、次節において、まず受容史的背景から假説を提示し、次いで主に同時代の日記類に見られる東坡と山谷についての記述や詩文の引用からその假説を検証する、という順序で、両者の享受のあり方の相違という問題について考えてみたい。

### 三 五山禅僧の日記に記された東坡と山谷（結果・考察）

#### 三―一 禅林と公家社会の違い

中世文化人の間での東坡と山谷の享受の様相を考えるにあたり、まず少し立ち戻って、公家社会と禅林における違いに目を向けてみたい。芳賀によれば、東坡と山谷の流行の度合いの違いは、公家社会における方が禅林におけるよりも大きなものだとして認められるのであった。そのことはおおむね首肯されるのであるが、ではそれはどのような理由に基づくのであろうか。芳賀自身は、公家社会における山谷詩への淡泊さについて、「その基くところは色々あらうが、少くもその最も主體的な契機の一つに「山谷波瀾過タリ、杜子美ハ如二大海一、希ニ波瀾アリ、仍其味深<sub>云々</sub>（實、永正十二・正・八）」といふ月舟壽桂の山谷評——それを興味をもつて書留める限り實隆の山谷評のあることは、およそ否めないところであらう」と、山谷の詩の内容ないし価値そのものが東坡ほどには東山文化の担い手達の好みに合わなかったということを示唆している。ただそうすると、禅林との違いはどこに求められるのが問題にな

るであろう。これについては、「山谷詩がこのようにわが禅林に重んぜられたのは、一つには後にみる如く山谷に系譜するいわゆる江西派の詩論・詩話の類が多く読まれたことによるであろう。しかしまた、山谷が黄竜の晦堂祖心に参じ木犀の香の機縁で開悟し、後更に黔州への途上で忽然道の本然に通徹した大居士であり、それだけに（中略）その詩に禅味の横溢したもの多いことも、他の有力な契機ではないであろうか」と論ぜられている。要するに公家と禅僧との好みの違いということになるであろうが、本稿の筆者としては、そのような問題もさることながら、日本において享受されたのが、東坡は早く、山谷はそれよりもやや遅れたという、時期の問題が大きいのではないかと思う。

### 三―二 東坡と山谷の受容の時期

東坡の受容が山谷に先行していたことは、これも芳賀の研究によって指摘されたところであるが、東坡が虎関師鍊・中巖円月・義堂周信といった南北朝の僧達に既に尊崇されていたのに対し、山谷は、虎関こそ『済北集』中にその文才を称揚しているが、中巖・義堂においては言及されることなく、「普門院藏書目録には東坡に関するものは見えても山谷に関するものは見えない」「少くも南北朝期の禅林には、まだ彼が親しまれていなかったことだけは、推定して大過ないであろう」と結論づけられている。東坡も山谷も最初は禅僧に愛され、それが貴族の間にも広まっていくのであるが、その受容の時期の遅早によって、貴族社会における享受のあり方も、東坡はより早く広まり、山谷は、少なくとも『實隆公記』から見られる時代には、まだそこまでの浸透を見せていなかったのではなからうか。

これはあくまで假説に過ぎないが、それを支持する事実を、いくつか指摘することは可能である。

一つは、ごく単純な事実ではあるが、山谷詩についての講義は、後の時代にも継続的に行われていた記録が残っているということである。江戸時代に入ってから記録となるが、『鹿苑日録』には

南禪長松玄甫(註)和尚被講山谷。被侍其席ト云々。『鹿苑日録』慶長八(註)（1603）年九月二十二日

至聽松。聽山谷講尺。序半分及申頭相了。各々同途シテ歸院。〔『鹿苑日録』同年九月二十八日〕  
 則酒了テ至聽松。侍講尺席。自江梅佳實詩。至小大材殊氣味誠相似ト云處ニテ講之。及申刻歸院。〔『鹿苑日録』  
 同年十月四日〕

とあるほか、元和三年にも次のように筆録者自身の五回の講義の記録がある。

晩爲若輩之衆講山谷之詩一兩枚。〔『鹿苑日録』元和三（1617）年十月二十日〕

講山谷之詩。〔『鹿苑日録』同年十月二十八日〕

講山谷詩。〔『鹿苑日録』同年十一月十九日〕

講山谷詩。〔『鹿苑日録』同年十二月十日〕

講山谷詩。〔『鹿苑日録』同年十二月十七日〕

さらに元和四（1618）年には鹿苑院で七回、八條殿で六回の講義があり、元和五（1619）年にも六回の講義が開かれたことが記録されている。<sup>27)</sup>

もつとも東坡詩にも、次のように、この時期の講義の記録が見えないわけではない。

於建仁有東坡講尺。此故ニ各々誘引（前カ）聽聞之。〔『鹿苑日録』慶長八（1603）年六月二十八日〕

齋了侍禁裡韓東堂東坡講釋之席。〔『鹿苑日録』慶長十八（1613）年八月十日〕

齋了文英韓東堂於八條殿下講東坡。予亦往聽矣。〔『鹿苑日録』同年八月十八日〕

特に慶長十八年の文英清韓の講義はこのあと少なくとも十回開かれている。<sup>29)</sup>しかしそれは一人の講師による一連の



講義であり、少なくとも回数や多様さの面から見る限り、江戸時代初期の講義は山谷の方が盛んであったように思われる。

また前節で紹介した柳田の研究において、より多くの抄物が作られているのが山谷の方だということも、この考え方によって一応は整合的に説明できる。東坡の受容は南北朝期に既に積極的に行われていたため、抄物が多数作られた室町時代後期から戦国時代にかけては、もはやそれほどの熱情的なものがなく、却って新しい流行である山谷の抄物が多数作られたのだと理解されるのである<sup>10)</sup>。

### 三―三 東坡詩文の古典化

このような考えをさらに推し進めてゆくと、早く享受されて親しまれた東坡の詩文は、それだけ早く浸透し、まずは五山禅僧、次いで公家の間で、いわば古典化していったのではないかと考えられてくる。そのような古典としての東坡の権威は、たとえば『蔭涼軒日録』の次のような記述に、最も端的に看取することができるであろう。

齋罷謁<sup>二</sup>東府<sup>一</sup>。東求堂御書院被<sup>レ</sup>置<sup>二</sup>三重小棚<sup>一</sup>。宜<sup>レ</sup>見<sup>レ</sup>置<sup>レ</sup>之書可<sup>レ</sup>擇<sup>レ</sup>之之命有<sup>レ</sup>之。乃於<sup>二</sup>御對面所西六間<sup>一</sup>擇<sup>レ</sup>書。東坡文集廿冊。方輿勝覽十五冊。韻會十冊。李白詩七冊。大廣益會玉篇五冊。以上五部奉<sup>レ</sup>置<sup>レ</sup>之。〔蔭涼軒日録』文明十八(1486)年三月二十八日)

「東求堂」は慈照寺(いわゆる銀閣寺)にこの年完成した持仏堂のことと見られるが、『蔭涼軒日録』の筆録者は東府(足利義政)からその「二重小棚」にどんな書物を置いておくべきかを問われ、その東坡の文集をはじめ五部を挙げている。このような場に置かれる書物は、主人が普段よく目を通すものであるということ以上に、そこに訪れる客に主人の知性と教養を示すという役割が重要である<sup>11)</sup>。東坡の文集は、そのような小道具の一つとして、李白詩や辞

書などと並び、否その筆頭として、挙げられるほどのものであったのである。

このほかにも、たとえば瑞溪周鳳『温泉行記』寶徳四（1452）年四月十一日条には、有馬温泉に湯治に行った際に八首の漢詩を作ることの思い立ち、それに「湯村客舎八詠」と名づけたことが記されている。その「八詠」の由来を述べた内容に

遂演作八首、每首四句、每句五字、名之曰湯村客舎八詠、然止於八何也、曰、沈休文東吳八詠、及杜少陵秋興八首、蘇子瞻鳳翔八觀、皆是以爲據、…（『温泉行記』寶徳四（1452）年四月十一日）

とあって、六朝の沈休文（沈約）・唐の杜少陵（杜甫）と並んで宋の蘇子瞻（東坡）が、拠るべき典拠として挙げられている。このような例も、東坡が範とすべき古典としての地位を獲得していたことを証拠づけるものと考えられよう。

そしてこのような東坡の扱いは、記録者個人の好みの問題にとどまるものではなく、五山禅林全体、さらには公家社会までを含むものであったと考えて誤りないであろう。というのは、次のように、禅僧や公家の参加する詩会において、東坡の詩句や、彼に関する故事が詩題に選ばれることがあったからである。

十一日、於承天之招慶玕<sup>軒カ</sup>、江湖諸老宿兄弟有雅會、題者竜興寺賞牡丹、坡詩十四、<sup>33</sup>有此詩、…（『蔗軒日録』文明十八（1486）年三月十二日）

十三日、正法寺にて短冊の評あり。詩の題は竜尾硯也。この硯は東坡が詩集に見えたるにや。<sup>14</sup>さる硯のありし故なり。（『藤河の記』）

『蕉軒日録』は季弘大叔(1421～1487)の日記、『藤河の記』は一条兼良(1402～1481)の紀行文であるが、このような文人たちの参加する詩会において、東坡に関する事物が題として出されているのである。それは、このような詩会の参加者であれば、東坡の詩句は知っていて当然、少なくともテキストを持っていて容易に参照できるであろうと期待されていたことを物語るであろう。

目についたままにさらに例を挙げれば、次の例は筆録者季瓊真薬が東坡の詞句を自らの座右の銘として位置づけていたことを記したものである。

東坡居士自題「書于金山精舍」。觀<sub>レ</sub>之其語言三昧爲<sub>レ</sub>妙。以<sub>レ</sub>之殆座右銘也。『蔭涼軒日録』寛正五(1464)年十月六日)

さらに次のように、横川景三(1429～1493)が相公(足利義尚)から賜った硯に東坡の銘がついていた、というような例も見える。

自「相公」被<sub>レ</sub>出「鄴瓦硯一面」曰。此瓦硯東坡銘在<sub>レ</sub>之。賜<sub>二</sub>横川「可<sub>レ</sub>傳<sub>レ</sub>之。愚敬白。横川定可<sub>二</sub>忝存<sub>一</sub>」云々。『蔭涼軒日録』文明十九(1487)年二月三日)

いずれの例も、東坡が禅僧たちにとって権威としての重みを持っていたことの証左とするに足るのではなからうか。

さらにまた、第二節では、先行研究として、『翰林五鳳集』では東坡に関する詩が他を圧して多い、という芳賀の指摘を紹介したが、これも単なる流行というよりも、それに基づいて自らの詩を製作する、抛るべき古典としての地

位の反映と解されよう。

### 三―四 東坡と山谷との享受の相違

そしてこのような東坡の權威は、山谷の享受のあり方と比較することによって、いっそう鮮明になるように思われる。記録に残る限り、山谷の詩は、書院の本棚に飾りとして置かれることもなく、禅僧たちが自らの詩の題の典拠にすることもなく、また詩会の題として共有されることもないのである。

ややそれに近い扱いかと見られるのは、萬里集九（1428〜？）の『梅花無盡藏』に収められた、甘露寺氏長（1449〜1509）の小亭の「江南」という額に萬里が賛した例である。

「前光祿大夫、甘露寺閣下、卜レ隱於東濃革城」。築二小亭一扁二江南一」

岡花過後、漸楓葉。忽掛二衣冠一住二此間一。自レ古江南多二隱士一。摩圍獨許、白鷗閑『梅花無盡藏』第一（190）

この賛は山谷『演雅』<sup>36</sup>の詞句「江南野水碧於天、中有白鷗閑似我」に基づくもので、額に「江南」とあるところから同じ詞句中の「白鷗閑」をつけたのだと考えられる。甘露寺氏長にもともと山谷への意識があったかどうかは分からないが、もしもあつたとすれば、山谷の古典化の一例とも見られるかもしれない。しかし假にそうであつたとしても、東坡の場合と決定的に異なるのは、山谷の詩に基づくという言明がないことである。右の「江南」額の場合は、『演雅』詩の詞句を記憶していれば山谷との関わりに気づくかもしれないが、そうでなければそのことは分からない。この程度の典拠であれば、山谷の詩でなくとも、探せばいくらでも見つかるであろう。それに対して東坡の詩句が詩会の題として選ばれる場合、当然かもしれないが、その題が東坡に基づくものということが分かるようになっており、それゆえにそのことが記録に残されていたのであつた。それは、東坡がそれだけ必須の教養として共有されてい

たこと、それに対して山谷は常識と言えるほどの地位は獲得していなかったことから帰結する現象なのではなからうか。

### 三一五 山谷詩の享受の特徴

それでは山谷詩の享受は、どのように特徴づけられるのだろうか。禅僧たちの記録の中に見える、次の例に基づいて考えてみたい。

十日、赴諷、以餘燠之湯洗面、山谷第十五<sup>17</sup>、有脚婆之詩、讀之、不覺一咲、〔蔗軒日録〕文明十八（1486）年十月十日）

「脚婆之詩」は、『山谷詩集注』巻十五「戲詠煖足餅二首」のことで、その第二首「脚婆元不食、纏裹一衲足、天明更傾瀉、頰面有餘燠」に基づく記述である。夜使った湯たんぼの中の湯を朝方洗面に使う、というごく日常の現実と詩の内容との一致を記したものであり、「餘燠」は詩中の語を典拠としてそのまま用いている。ただ古典としての重みはあまり感じられず、むしろこのようなさほど重要とは思われない戯詠の表現の細部までよく記憶していること、その表現と日常の景・情との一致を楽しむエスプリが、山谷の享受のあり方を特徴づけるものなのではないかと思われる。次の『蔭涼軒日録』も同様の例と考えてよいであろう。

飯後茶話。以後歛<sup>レ</sup>枕。聊美睡自樂。喚<sup>ニ</sup>爲<sup>レ</sup>攤<sup>レ</sup>飯睡<sup>ニ</sup>云者乎。山谷詩曰。馬嚙<sup>ニ</sup>枯箕<sup>一</sup>喧<sup>ニ</sup>午枕<sup>一</sup>。即今一二湯前。奴婢僕童。爭<sup>ニ</sup>旅人所<sup>レ</sup>浴之前後次篇<sup>一</sup>。其聲忽開紛<sup>ニ</sup>墮于午睡之枕<sup>一</sup>。依<sup>レ</sup>之記<sup>ニ</sup>此句<sup>一</sup>自擊<sup>レ</sup>節會<sup>レ</sup>之。〔蔭涼軒日録〕文正元（1466）年閏二月十九日）

二之湯兵衛家修<sub>レ</sub>。而人聲喧也。山谷曰。馬嚙<sub>二</sub>枯筴<sub>一</sub>。喧<sub>二</sub>午枕<sub>一</sub>。夢爲<sub>二</sub>風雨<sub>一</sub>。浪<sub>二</sub>翻江<sub>一</sub>。句。以<sub>二</sub>午睡<sub>一</sub>爲<sub>二</sub>恰好<sub>一</sub>。記<sub>レ</sub>之。今晨又前夜歛<sub>レ</sub>枕聞<sub>レ</sub>之。礪水納<sub>二</sub>夜潺<sub>一</sub>。篔竹漏<sub>二</sub>餘滴<sub>一</sub>。其響終夜如<sub>レ</sub>雨。仍記<sub>二</sub>此句<sub>一</sub>云。兩日而記<sub>二</sub>此二句<sub>一</sub>。應<sub>レ</sub>時應<sub>レ</sub>機應<sub>レ</sub>境。仍以効<sub>レ</sub>之。〔蔭涼軒日録〕同二十日〕

筆録者季瓊真蘂自身が「應時應機應境」と記すように、昼寝の枕元で騒がしい音がするというごく日常的な場面と、さほど重要とも思われない詩（六月十七日晝寝）の内容との一致を楽しむ趣は、先の「戲詠煖足餅二首」の「餘燠」と共通すると見られよう。

禅僧たちの記録の中に見える山谷の詩の、このような日常とのつながりを強く持つというあり方は、東坡の場合とは大いに異なっている。たしかに東坡詩にも、次のように記録者たちの日常の中で彼の詞句が浮かんでくるような例は認められる。

阿彌陀堂前櫻花當<sub>二</sub>于御所坊東簷<sub>一</sub>。朝暮座對<sub>レ</sub>之。尤慰<sub>二</sub>惜餘春<sub>一</sub>之懷也。東坡句曰。惆悵東欄一株雪。自然憶<sub>二</sub>着<sub>一</sub>之。此景以實可<sub>レ</sub>比乎。〔蔭涼軒日録〕正文元（1496）年閏二月十九日）

しかしこの例は、阿彌陀堂の前の桜の花を見て過ぎゆく春を惜しむ気持ちを抱き、その思いに通ずる東坡の詩を自然に思い出したことを記したものである。「惆悵東欄一株雪」は東坡の七言絶句「東欄梨花」に見える詩句で、このあとは「人生看得幾清明」と続く。確かに記録者の日常の思いと通ずる表現ではあるが、季節の移り変わりへの悲しみ、そして人生のはかなさを見つめるものなのである。さらにこの「惆悵東欄一株雪」の句は、五山禅僧の間で相当によく知られた、古典としての地位を持つものだったようであり、

## 畫軸

東欄過却一株春。佳實今誇席上珍。酸味稍多甘味少。北人未薦齒生津。(桂菴玄樹『島隱集』)

## 清明後一日看花

惆悵東欄雪一枝。狂風捲地不禁吹。莫言昨日桐華日。春半意迷秋葉時。(景徐周麟『宜竹殘藁』)

折枝梨花讚州障畫

知學梨花製玉盃。樽前先獻一枝來。醉中不識東欄雪。默々寒樹社後開。(天隱龍澤『默雲詩藁』)

## 花底春寒

年後春寒半月程。相逢尽盡道未聞鶯。東欄雪白耶心白。(マ)耐耐梨花落也驚。(雪嶺永瑾『梅溪稿』)

など、この詩を典故として「東欄の雪」と「梨花」や「清明」を詠みこむ五山僧の作は、枚挙に暇がない。先に挙げた山谷の「戲詠煖足餅二首」や「六月十七日晝寢」の詞句を用いた禅僧の詩文は容易には見いだせず、その点でも両者の違いは明らかかなのではないかと思われる。山谷の詩が時に応じ機に應じ境に應じて軽快に引用されるのに対し、東坡はあくまで古典として、拠るべき規範としての重みを失わないのである。

## 三一六 学びの楽しみ

もつともこのことから、山谷の詩が東坡ほどには流行していなかったと考えるのは、適切とは言えないように思う。むしろ、流行という点では、この時代の山谷は東坡をしのぐほどのものであったと考えたいのである。というのは、記録中に引用されていた山谷の詞句は、いずれも決して著名なものとは言えない詩からの引用であったからである。そのようないわばマイナーな作品を日記の中に引用できるということは、彼らがいかに熱心に山谷詩を学んでいたかを克明に物語るのではなからうか。さらに一歩踏み込んで言えば、そこには、他愛ない戯詠をも覚えていて引用

できる、ということとさらに誇示する態度がほの見えるように思われる。記録の中に残された山谷詩の文句は、東坡詩のような古典とは言いがたいものであった。それを敢えて日記の中に引用するという営みの背後にあるのは、自らの学びの成果を記録しておきたいという意志なのではないか。そしてこのような、著名とは言えない作品まで克明に記憶しておこうという態度は、東坡のように古典として共有されたものを学ぼうとする態度よりもよほど、流行という表現が適当なのではないかと思われる。さらにまた、第二節で述べた、山谷詩の方が東坡詩よりも多くの系統の抄物が残されているという事実も、この学びの流行という面を含めて見ることで初めて十全に説明できるように思われるのである。

#### 四 おわりに（結論と課題）

本稿では主に五山禅僧たちの日記の記述を追っていくことによって、中世文化人にとつての蘇東坡詩と黄山谷詩の享受のあり方の相違について検討した。結論を一言でまとめれば、まず東坡については、拠るべき規範となる古典として重んぜられる存在であったと考えられる。したがって、中世の文化に与えた影響は東坡と山谷のどちらが大きかったのか、という単純な問いを立てるならば、先行研究でも示されてきたとおり、東坡と答えるのが穏当であろう。しかしここでは、山谷の人氣と流行も決して東坡に劣るものではなく、ただ両者の間には楽しみ方の違いがあったのだということを強調したい。東坡に対して山谷は、日常と詩興との一致を機知的に楽しむという軽さを持つものであった。その底には、詩中に用いられる表現を正確に記憶し、引用することに喜びをおぼえるというような一種の *pedantisme* が流れている。そしてそのような趣味のために、山谷の詩は、講義が頻繁に開かれ、抄物が多数編纂され、といった営みを通じて、ごく知的に楽しまれたと考えられるのである。

とはいえ、以上は管見によって得られたわずかな用例から導いた假説に過ぎない。より精密には、五山僧や公家た



ちの手になる漢詩文や和歌、あるいは彼らの参加した連歌や聯句、さらには抄物の類を広く見渡して、検証していかねばならないであろう。そのことは、中世後期における漢と和の交渉に新たな把握を提示するという課題にも連続するであろう。

中世後期の文化について発言するのは、これがはじめてである。見当違いの、或いは逆に常識的な、言辞が多いであろうことを恐れる。御批正を乞うものである。

### 〈注〉

(1) 『中世禅林の学問および文学に関する研究』二八七頁。

(2) 本稿では、和暦の年には目安として西暦(グレゴリオ暦)年を併記する。これは原則的にはおおよそ対応する年を示すが、月日までを記す場合には、その月日における西暦年を示すこととする。このため、和暦の年と西暦年とは必ずしも一対一に対応しない。たとえば和暦の天文七年はおおよそ西暦一五三八年に対応するが、天文七年十二月十一日は西暦一五三九年の一月一日であり、本稿でこの日を記すときには「天文七(1539.1)年十二月十一日」とする。「二」は、この場合、西暦一五三九年の十二月と混同しないよう、一月であることを明示するものである。

(3) 本文にある「煎」は現代語ではイルと訓むが、たとえば文明本節用集には「烹煎煮湘」とあり、当時はニルという訓もあつたようである。この「煎」も「煮る」の意にとつてよいかと思われる。

(4) やや時代が下るが『本朝食鑑』卷之二、穀部之二、造醸類十五「味噌」の項目には「用テ好大豆最肥大ナル者ヲ、浸コト水ニ一夜、取出シ煮熟(中略)待テ其ノ豆ノ煮熟シ變シテ赤黄ヲ、而搗レク白ニ者数千杵、合レメ如レサ泥ノ、攤ニ于板上ニ令略乾カ、(中略)別ニ用テ精白米麴好白塩ヲ拌勻シテ、以テ揉合セ于豆泥ニ、再ヒ搗クモ白中

亦数千杵、取出<sup>シテ</sup>収<sup>ニ</sup>藏木桶<sup>ニ</sup>、経<sup>テ</sup>二三十日<sup>一ヲ</sup>而成<sup>ル</sup>とあり、現代と同じく豆を煮た後に麴と塩と混ぜ合わせるものであったらしい。

(5) 南畝にこの説があることは小林祥次郎『新装増補版日本のことば遊び』(二〇〇八年、勉誠出版)に指摘がある。p.112。

(6) 日本随筆大成版では巻八。

(7) 覃(ふかし)は南畝の名。

(8) 『東山文化の研究』および『中世禅林の学問および文学に関する研究』。

(9) 室町時代後期から戦国時代(十五世紀後半から十六世紀後半)に行われていた東坡の講義について、芳賀幸四郎の研究を補足する形でここでまとめておく。

まず芳賀は、次の a. から g. の講義について報告している。

a. 近衛邸における要西堂の講義。近衛政家・隨心院嚴寶とともに聴講。『後法興院記』文明十二(1481)年八月三日、十五日、二十二日、二十六日、九月三日、十一日、二十三日、十月三日、十一月五日、二十六月、十二月三日、十一日、十六日、十四(1482)年三月九日に記録が残る。

要西堂の人物来歴については不詳。ただ「西堂」とある以上、禅僧であることは疑われないであろう。

b. 近衛邸における湜西堂の講義。近衛政家・勸修寺経茂・菅原章長等聴講。『後法興院記』明應四(1495)年二月五日、二十五日に記録が残る。湜西堂も禅僧であることのほかは一切不明。

c. 徳大寺邸における桃源瑞仙のものと思われる講義。徳大寺実淳・三条西実隆ら聴講。『実隆公記』文明十六(1484)年八月二十七日(巻二初)、九月四日、十三日、十七日(巻二終)、十月四日、九日、十七日、二十七日、十一月四日(巻三終)、十七(1485)年閏三月九日(巻五始)、十七日、二十七日、四月六日、九日(巻五終)、五月二十七日(巻六)、六月四日、九日、十七日、二十七日、七月四日、十八日、二十七

日、八月二十七日、九月四日、八日(巻八)、十八日、二十七日、十月四日、九日、十七日、十一月十四日、二十七日(巻九終)、十二月九日、十八(1486)年四月二十九日(巻十一)、五月十九日に記録が残る。

講師を桃源と推定するのは、文明十六(1484)年十二月四日の記事に「向徳大寺亭、東坡講尺依桃源風□<sub>所</sub>勞延引、聯句卅句興行」とあるところから。また同年八月二十七日条「向徳大寺亭、東坡詩講尺〔第二巻初〕也、歸路向桃源和尚室」も傍証として挙げられる。

【補足】 さらに文明十七(1485)年十一月二十四日、十八(1486)年五月二十三日、十一月一日(巻十二)にも記録が見出される。

d. 徳大寺邸における彦龍周興(1458～1492)の講義。『実隆公記』延徳二(1490)年八月二日、九日に記録が残る。

e. 相国寺聯輝軒における就山永崇の講義。三条西公條聽講。『実隆公記』永正三(1506)年五月三日、十三日、十八日、二十四日、六月二日、七日、七月二十日、二十三日、二十九日、八月十五日、二十一日、九月四日、六日、十六日(巻八始)、十月二十八日、十一月四日、八日、十五日(巻八終)、閏十一月五日、十一日、二十二日、二十六日、十二月十八日(巻十)、四(1507)年一月二十七日、三月十三日、四月十八日、二十七日、五月八日、六月二十日(巻十二)、二十二日、九月二十二日、二十七日、十月五日、九日、二十日、二十四日、二十八日、十一月四日、二十日、二十四日、三十日、十二月六日、五(1508)年一月二十四日、三十日、二月四日、九日に記録が残る。

【補足】 永正三(1507.1)年十二月九日にも記録が見出される。

f. 伏見宮家における菅原(高辻)章長(1469～1523)のものと思われる講義。三条西公條聽講。『実隆公記』永正三(1506)年五月六日、十一日、十六日、二十一日、六月十二日、十八日、七月十七日、二十二日、二十七日、八月二日、七日、十九日、九月十一日、二十一日、十月二十日、二十六日、十一月三日、

十八日、二十二日、二十七日、閏十一月二十五日（卷三終）、四（1507）年一月二十七日、四月二十七日<sup>(2)</sup>に記録が残る。

講師を章長と推定する根拠は、『実隆公記』永正三（1506）年七月十七日条に「今日竹園東坡講也、中將參入、章長朝臣歸路來臨、中將讀文選」とあって、章長が講義の帰りに三条西邸に立ち寄っていること、また次に見えるように四回にわたって彼が公条に対して闕席した分の補講を行っていること、

章長朝臣午後來臨、講東坡第一、是於竹園頭中將不聞之所々補闕分也（『実隆公記』永正三（1506）年五月二十八日）

東坡補闕講尺、章長朝臣來臨、中御門黃門來聽（『実隆公記』同年六月八日）

章長朝臣來、東坡講尺（『実隆公記』同年六月二十四日）

頭中將參万松軒、等持入院珍重之由賀申之、又詣聯輝軒<sup>云々</sup>、歸宅時分章長朝臣來臨、東坡第一講尺在之、（今日件補闕分終功）（『実隆公記』同年七月五日）

さらに g. として挙げるように彼が後に後柏原天皇に進講していること、以上の三点である。

【補足】 永正三（1506）年十一月九日にも記録が見える。また同年九月二十一日の記事には「東坡講尺、公條朝臣參入、有聯句十句<sup>云々</sup>」とあるが、この内容からは伏見宮家で開かれたものか不明。同時期に開かれていた相国寺聯輝軒のもの可能性もある。なお永正四（1507）年四月二十七日は四月二十九日の誤り。

g. 後柏原天皇御前にて菅原章長進講。『実隆公記』永正九（1512）年閏四月十六日に記録が残る。

以上の芳賀の指摘に加え、『蔭涼軒日録』明應二（1493）年五月二十一日に「坡詩第一今日始教<sup>二</sup>宗菅喝食<sup>一</sup>」。山谷詩今月十三日讀<sup>二</sup>終<sup>一</sup>二十卷<sup>一</sup>、同二十五日に「菅亦教<sup>二</sup>坡詩<sup>一</sup>。五百首終<sup>レ</sup>之。予亦坡詩第六讀<sup>二</sup>了<sup>一</sup>。讀<sup>二</sup>

第七」とある。『蔭涼軒日録』のこの時期の筆録者は亀泉集証(1424～1493)であり、彼がその徒のために行ったものと見られる(h.)。同時期に山谷も習わせている。

さらに、『お湯殿の上日記』天文十一(1542)年五月十九日条に次の講義が記録されている(i.)。

しやうこく寺のせうせいとうはの十五のまきかうしやくさせらるゝ。

その後同年五月二十四日、三十日、六月四日、十日、十四日に記録が残る。

「しやうこく寺」は相国寺。「せうせいとう」は不明。御湯殿上日記研究会著『お湯殿の上の日記の研究』(続群書類従完成会、一九七三年)は「仙西堂」と翻刻する。

(10) 『東山文化の研究』三四〇頁。

(11) 山谷についても、東坡と同様に、室町時代後期から戦国時代の講義の記録を芳賀の研究を補足してまとめておく。まず芳賀が挙げる講義は次の四件である。

a. 加地左京亮邸における素晟藏主による講義。『康富記』寶徳二(1450)年八月八日(卷三)、十三日、九月十三日(卷四終)、二十三日(卷五)、康正元(1455)年九月十二日(卷一終)に記録あり。

講師素晟藏主は不詳。

b. 禁裡における蘭坡景菫(1417～1501)による講義。『実隆公記』文明十二(1480)年八月十四日、二十四日、十三(1481)年二月十二日、十五(1483)年九月十五日(卷十三)、十一月二十八日、延徳二(1490)年閏八月十一日(卷十六終)、九月六日(卷十八終)、十八日(「四休居士」以下)に記録あり。

【補足】この蘭坡の進講については、『お湯殿の上日記』にも記録されており、文明十一(1480)年

十一月二十三日、二十六日、二十九日、十二月二日、十一(1480)年五月十日、十三日、十七日、二十三日、八月十四日、十六日、十七日、二十四日、九月七日、八日、十二日、二十六日、十月二日、五日、十三(1481)年二月十二日、十六日、三月四日、二十三日、五月八日、九月八日、十七

日、二十四日、十月六日、十一日、十九日、十一月三日、十四（1482）年五月三日、二十二日、長享元（1487）年十月二十七日、十一月二日、延徳二（1490）年八月二十一日、閏八月十一日、二十一日、二十六日、九月六日、十八日、十月二日、七日に記事が見出される。芳賀は『お湯殿の上日記』は調査していないが、『実隆公記』の記録から「その着々たる進行からみて、實際は更に頻繁に催されたと推定して誤りなく、実隆が自らの聴講した限りに於いて記録したために、かう斷續してみえるだけのことと思ふ」と述べている（『東山文化の研究』三四三頁）。右の『お湯殿の上日記』の記録から、その慧眼が裏づけられることとなつたと言えるであらう。

c. 相国寺における景甫壽陵（?）による講義。『実隆公記』永正八（1511）年三月二十二日（卷二）、四月二十三日、五月二日、二十日に記録あり。

【補足】 三月四日、五月二十一日にも記録が見出された。

d. 亀泉集証がその徒のために行つた講義。『蔭涼軒日録』延徳三（1491）年十月二十一日、四（1492）年五月十三日、十四日等。

【補足】 『蔭涼軒日録』延徳三（1491）年十月二十一日条には「宗普喝食始習<sub>二</sub>山谷詩<sub>一</sub>。皆予教<sub>レ</sub>之。是日最上吉日也」とあって、やや私的な教授のようにも見え、c. までの講義とは性質を異にするかもしれない。なお、延徳三（1492.1）年十二月十六日、四（1492）年五月十四日、十八日、六月三十日、七月一日、明應二（1493）年四月七日、五月二十一日、七月十二日、十五日にも記録が見いだされる。

これらに加え、雲泉（相国寺雲泉軒のことと思われる）においても、講者は不明であるが講義が開かれていた記録が残っている（e.）。『鹿苑日録』永祿九（1566）年七月二十一日条に「於雲泉有山谷之講。自曉鐘上

洛。七之卷也」とあるほか、二十六日、八月一日、五日（巻七終）、十日、二十一日（巻八終）、閏八月二日、十六日、二十一日（巻九終）、二十六日（巻十始）、九月八日、十四日に記事が見える。目新しい事実ではないが、他の論文等では報告されていないものゆえ、ここに附言しておく。

(12) 『東山文化の研究』三四三頁。

(13) 『中世禅林の学問および文学に関する研究』二八六頁。なお、『翰林五鳳集』の巻五十八から巻六十一までは「支那人名部」と題され、彼土の文人たちにつまわる五山禅僧の詩文が収められている。

(14) 『中世禅林の学問および文学に関する研究』二八八〜九頁。

(15) 『中世禅林の学問および文学に関する研究』二八八頁。

(16) 「経・史・子」部は柳田征司「抄物目録稿（原典漢籍経史子類の部）」（『訓点語と訓点資料』第七〇輯、一九八三年）として別にある。

(17) 具体的には次の八系統である。以下は柳田の目録を粗雑にまとめたにすぎないものゆえ、詳細は原論文を参照されたい。

(1) 萬里集九抄『天下白』の系統

(2) 笑雲清三抄『四河入海』の系統

(3) 林宗二・林宗和抄『東坡抄』の系統

(4) 抄者未詳『東坡抄』（市立米沢図書館蔵、天正十三（1585）年松鶴による写本）の系統

(5) 抄者未詳『東坡抄』（慶應義塾図書館蔵、室町後期写本）の系統

(6) 月溪聖澄講『東坡聞書』の系統

(7) 文英清韓講『東坡聞書』の系統

(8) 江西龍派講勝剛長柔聞書『東坡詩抄（梅野的聞）』の系統

(18) 東坡と同様、山谷についても全系統を示しておく。注(17)と同様、詳細は柳田論文を参照のこと。

(1) 抄者未詳『山谷詩註』『思文閣古書資料目録』第一〇〇号(一九七七・八)所載、室町中期写本の系統

(2) 抄者未詳『山谷詩抄』(永観文庫蔵、一言講『詩経抄』の下巻に竄入する延徳頃写本)の系統

(3) 萬里集九抄『帳中香』の系統

(4) 一韓智翹抄『山谷詩抄』の系統

(5) 月舟寿桂抄林宗二写『山谷詩抄』の系統(拙稿「両足院蔵『黄氏口義』の構成と成立について」で「山谷幻雲抄」と呼ぶ本)

(6) 彭叔守仙抄(自筆本)『黄山谷詩抄』の系統

(7) 林宗二抄(自筆本)『山谷詩私抄』の系統(前掲拙稿において「黄氏口義」と呼ぶ本)

(8) 抄者未詳『山谷詩抄』(お茶の水図書館成實堂文庫蔵、室町末期写本など)の系統

(9) 抄者未詳『黄山谷詩抄』(陽明文庫蔵『黄鳥鉢抄』後半など)の系統

(10) 抄者未詳『山谷詩抄』(東京大学文学部国語研究室蔵、室町末期写本)の系統

(11) 抄者未詳『山谷詩抄』(筑波大学附属図書館蔵、江戸時代前期写本など)の系統

(12) 抄者未詳『山谷略抄』(足利学校遺跡図書館蔵、室町末期写本)の系統

(13) 抄者未詳『山谷注之問書』(京都大学附属図書館蔵、室町末期写本)の系統

(14) 抄者未詳『山谷詩抄』(積翠軒文庫旧蔵、慶長中頃写本)の系統

【未見のため系統未詳の本】

(15) 抄者未詳『宋少陵詩抄(黄山谷抄)』(積翠軒文庫旧蔵、室町末期写本の系統)

【未見のため抄物であるかどうか未詳】

(16) 『山谷黄先生詩注抄』(足利学校遺跡図書館蔵、室町末〜江戸初期写本の系統)



- (19) 「演雅」詩単体の抄についても、全系統を挙げておく。こちらも、詳細は柳田論文を参照されたい。
- (1) 一韓智邈抄『山谷演雅詩抄』の系統
- (2) 抄者未詳『山谷演雅詩抄』(東京大学文学部国語研究室蔵、天正十九年写本の影写本)の系統  
(江戸時代成立のものであるかも知れぬ本)
- (3) 抄者未詳『山谷演雅之詩抄』(天理図書館蔵、江戸前期写本)の系統
- (4) 抄者未詳『山谷演雅詩抄』(慶應義塾大学附属研究所斯道文庫蔵、綴葉装、江戸前期写本)の系統
- (5) 抄者未詳『演雅詩抄』(慶應義塾大学附属研究所斯道文庫蔵、平假名交り体、江戸前期写本)の系統
- (20) 『東山文化の研究』三四三頁。
- (21) 『中世禅林の学問および文学に関する研究』二九〇頁。なお、先に引用した『蕉窓夜話』に「山谷ガ一向ニ僧ノ様ナル人ヂヤゾ。僧デナイ処ハ鬚鬚トガアルマデゾ」とあるように、山谷が仏教的な性格を有することはこの時代に既に共有された知識であった。
- (22) 『中世禅林の学問および文学に関する研究』二八七〜八頁。
- (23) 前節注(9) および注(10) で紹介した講義において、会場が貴族の邸宅であっても講師は主に禅僧がつかつていたこと、また注(17)と注(19)に挙げられていた抄物のうち、判明している抄者は、林宗二・宗和を除けば全て禅僧であったことを思い合わせたい。
- (24) 南禅寺第二百六十六世、玄圃靈二(1535〜1608)。退隠して寺内の塔頭、聴松院に住していた。
- (25) 『鹿苑日録』のこの時期の筆録者は听叔頭暉きんしゆくけんたく。彼は元和八(1622)年に禁裡にて後水尾天皇に『錦繡段』を進講するなど博学の人であった。
- (26) 鹿苑院での講義は六月二十五日、七月六日、十三日、二十日、二十八日、八月八日、九月二日の各条、八條殿のは六月二十八日、七月八日、十二日、三十日、八月二十五日、九月二十七日の各条に、それぞれ記録が残

- る。
- (27) 十月二十四日(三卷之始)、十一月五日、十六日、二十九日、十二月十七日、二十二日の各条に記録が残る。
- (28) 南禅寺の長老であった文英清韓(1568～1621)。次の九月十八日条に見える「文英韓東堂」も同じ。注(17)で柳田征司「抄物目録稿(原典漢籍集類の部)」に見える東坡の抄物を紹介した際、(7)として挙げた文英清韓講『東坡聞書』は、慶長十八(1613)年の写本が伝えられており(佐藤道生氏蔵)、このときの講義のものとと思われる。なお文英清韓はこの翌年の慶長十九(1614)年四月、方広寺の大仏殿梵鐘の銘文起草しているが、これが徳川家康の非難を受け、いわゆる方広寺鐘銘事件に発展、南禅寺を追われることになる。
- (29) 『鹿苑日録』慶長十八(1613)年八月二十一日、二十四日、二十七日、九月二日、六日、二十三日、二十九日、十月三日、九日、十二日に記事が見える。
- (30) 山谷の抄物が多数作られた理由については、なお論ずべき内容が残っているが、それは後の三一六節において述べることにしたい。
- (31) この時期の筆録者は季瓊真蘂(1401～1469)。
- (32) 第二次世界大戦後のある時期まで、日本の家庭において、百科事典を応接間の棚に飾っておくことがある種のステータスシンボルとなったことは、その典型的な例であろう。
- (33) 『蔭涼軒日録』文明十八年三月七日条に「桃源高先來曰。來十一日於龍興軒有詩會。携桂公可出。以龍興賞牡丹爲題。鹿苑院主亦可光降<sup>云々</sup>。龍興花事見于坡詩第十四惜花詩跋」とあり、この題が東坡詩集の卷十四「惜花」詩の跋「錢塘吉祥寺花爲第一。壬子清明賞會最盛。金盤綵籃以獻于座者五十三人、夜歸沙河塘上、觀者如山、爾後無復繼也。今年、諸家園圍花亦極盛。而龍興僧房一叢亦奇。但衰病牢落、自無以發興耳。昨且雨霪如此。花之存者有幾。可爲歎惜也」から取られたらしいことが分かる。ただし東坡詩集卷十四には他に「吉祥寺賞牡丹」と題する詩もあり、こちらも意識されていたことであろう。

なお、東坡の詩集には複数の系統があるが、二十五卷本の五山版『王狀元諸家註分類東坡先生詩』は、『四河入海』などの抄物の基づくところでもあり、最も普及した系統と考えられる。右の『蔭涼軒日録』には「惜花」詩が卷十四にあると記されているが、この本でも当該の詩が卷十四に配されており、五山僧たちの用いていたのは主にこの系統と見てよいであろう。そのため本稿における引用にも、この系列の国会図書館南北朝刊本『王狀元集諸家注分類東坡先生詩』（以下『東坡先生詩』）を用いた。

(34) 「竜尾硯」は、『東坡先生詩』卷十二に「龍尾硯歌<sup>并叙</sup>」と見える。

(35) 東坡には金山寺の詩が複数あるが、ここは卷十『金山寺與柳子玉飲大醉臥寶覺禪榻夜分方醒書其壁』「惡酒如惡人、相攻劇刀箭。頽然一榻上、勝之以不戰。詩翁氣雄拔、禪老語清軟。我醉都不知、但覺紅綠眩。醒時江月墮、撼撼風響變。惟有一龕燈、二豪俱不見」のことと思われる。

(36) 『演雅』詩は、注(19)で示したように単体の抄も作られており、山谷の詩の中でも最もポピュラーなものであった。

(37) 山谷の詩集は日本では『山谷黄先生大全詩註』と『山谷詩集註』の二種の五山版が作られているが、いずれも任淵の註した内集二十卷本であり、『蕉軒日録』がどちらの系統の本に基づいたか分からない。ちなみに抄物でも、萬里集九『帳中香』は『大全』に、林宗二『黄氏口義』は『集註』に、それぞれ基づいて抄したものである。

(38) 『山谷詩集註』卷十一「六月十七日晝寢」の詞句。全体は「紅塵席帽烏鞞裏、想見滄洲白鳥雙、馬齧枯筴誼午枕、夢成風雨浪翻江」。次の閏二月二十日条も同じ。

(39) 日記に残された山谷詩の引用の全てがこのような日常との一致に感ずるものというわけではない。次のような例では、山谷の詩の内容が真剣に議論されたことを記している。

一華曰、山谷詩曰、潛魚願深渺、以下論淵明改字之事、不啻爲慕諸葛亮、又由淵明之字乎、盖以淵明、則

魚難潛也、陶意在深潛故也云々、一華義有理（『臥雲日件録』康正元（1455）年十月六日）

山谷四休居士詩末有曰、不伐之家云々、少年間双桂講曰「名利之敵、不來伐也、盖征伐之伐也（『臥雲日件録』長祿元（1457）年二月三日）」

「潜魚願深渺」は『山谷詩集注』卷一「宿舊彭澤懷陶令」詩の冒頭「潜魚願深渺、淵明無由逃。彭澤當此時、沉冥一世豪」である。また後者「四休居士詩」は卷十九に見え、その序で四休居士と山谷の会話が記され、山谷自身の言葉として「此安樂法也、夫少欲者不伐之家也、知足者極樂之國也」とある。なお、一つの引用にある「一華」は、南禅寺第百九十一世、一華建徳（いっかげんぶ）のこと。『臥雲日件録』にはしばしば登場し、筆録者瑞溪周鳳とは親密な間柄であつたらしい。

(40) 『東坡先生詩』卷十「和孔密州五絶」中の一。

#### 〈参考文献〉

葛清行「兩足院所蔵『黃氏口義』の構成と成立について」『訓点語と訓点資料』一三五輯、二〇一五年

芳賀幸四郎『東山文化の研究』河出書房、一九四五年（思文閣出版より『芳賀幸四郎歴史論集1・2』として再版、一九八一年。本稿では初版本を用いた）

芳賀幸四郎『中世禅林の学問および文学に関する研究』日本学術振興会、一九五六年（思文閣出版より『芳賀幸四郎歴史論集3』として再版、一九八一年。本稿では再版本を用いた）

柳田征司「抄物目録稿原典漢籍集類の部」『訓点語と訓点資料』第一一三輯、二〇〇四年

〔引用文献〕(いずれの文献も、句読点・濁点等は読解の便を考慮して適宜施した。漢字の字体は可能な限り底本のままとし、印刷字体の制限から対応できないものは、なるべく近い字体で代用した。割註は「」に括って示した。本文に傍記された註は省略したところがある)

蘇東坡の詩の引用は国会図書館蔵南北朝刊本『王状元集諸家注分類東坡先生詩』(国会図書館デジタルコレクションより閲覧)によった。

黄山谷の詩の引用は京都大学附属図書館谷村文庫蔵五山版『山谷詩集註』(京都大学電子図書館貴重資料画像より閲覧)によった。ただし缺失部分については同版の早稲田大学蔵五山版を用いた(早稲田大学古典籍総合データベースより閲覧)。

『一話一言』…日本随筆大成編輯部編『日本随筆大成別巻 一話一言』吉川弘文館、一九二八年(一九九六年、新装版が刊行。本稿では初版本を用いた)

『蔭涼軒日録』…玉村竹二・勝野隆信校訂編『蔭涼軒日録』史籍刊行会、一九五三〜五四四年(臨川書店より竹内理三編『続史料大成二一〜二五』として覆刻、一九七八年。本稿では覆刻版を用いた)

『お湯殿の上日記』…塙保己一、補太田藤四郎『続群書類従 補遺三 お湯殿の上日記』続群書類従完成会、一九三二〜三四(十一巻のみ一九六六)年

『臥雲日件録』…東京大学史料編纂所編纂『大日本古記録 臥雲日件録抜尤』岩波書店、一九六一年

『宜竹残藁』…塙保己一、補太田藤四郎『続群書類従 第十二輯下 文筆部』続群書類従完成会、一九二七年

『實隆公記』…高橋隆三編『實隆公記』続群書類従完成会太平洋社、一九五七〜六七年(巻一上〜巻六下は太平洋社『實隆公記』(一九三二〜三八)の再版。本稿では再版本を用いた)

『蕉窓夜話』…塙保己一、補太田藤四郎『続群書類従 第三十二輯下 雑部』続群書類従完成会、一九二四年

『蔗軒日録』…東京大学史料編纂所編纂『大日本古記録 蔗軒日録』岩波書店、一九五三年

『島隱集』…塙保己一、補太田藤四郎『続群書類従 第十二輯下 文筆部』続群書類従完成会、一九二七年  
 『梅花無盡藏』…市木武雄著『梅花無盡藏注釋』続群書類従完成会、一九九三～五年

『梅溪稿』…塙保己一、補太田藤四郎『続群書類従 第十三輯下 文筆部』続群書類従完成会、一九二六年

『藤河の記』…新日本古典文学大系 5 『中世日記紀行集』所収『藤河の記』岩波書店、一九九〇年

『默雲詩藁』…塙保己一、補太田藤四郎『続群書類従 第十三輯上 文筆部』続群書類従完成会、一九二五年

『鹿苑日録』…辻善之助編『鹿苑日録』大洋社、一九三四～三七（続群書類従完成会より再版、一九六一～六二年。本稿では再版本を用いた）

『本朝食鑑』…国会図書館蔵元禄十年整版本（国会図書館デジタルコレクションより閲覧）

『温泉行記』…玉村竹二編『五山文学新集 第五卷』所収『温泉行記』、東京大学出版会、一九七一年

### 〈附記〉

本稿は日本学術振興会科学研究費補助金（基盤研究（B））「中世近世国文学における中国文学受容の研究——和漢聯句と抄物を中心として——」（課題番号 24320048）による研究成果の一部である。

## **Su Shi and Huang Tingjian in Japanese Upper Class People in the Late Middle Ages**

Kiyoyuki TUTA

Su Shi and Huang Tingjian were the most popular poets in Japanese upper class people in the late middle ages. Past research has claimed that Su Shi's influence on Japanese culture was greater than Huang Tingjian's. In this study, we evaluate this claim through analysis of the diaries of Zen priests. Our results indicate that Su Shi was considered to be a classic or a normative model, while Huang Tingjian was reported to describe scenes in his poems that were similar to those in readers' daily lives. We conclude that the two poets do not differ in their degree of influence, so much as they differ in their character; that is, Su Shi was classic, while Huang Tingjian was modern.